

モンゴル語

斎 藤 純 男

(東京学芸大学留学生センター助教授)

1. 使用地域と人口

モンゴル系の言語は、モンゴル国、中国（モンゴル国の南と東に続く「内モンゴル自治区」、モンゴル国西南とカザフスタン東部に接する「新疆ウイグル自治区」など）、ロシア連邦（モンゴル国の北の「ブリヤート共和国」、ボルガ川下流域の「カルムイク共和国」）で話されている。一般に「モンゴル語」というと、これらのうちモンゴル国や中国の内モンゴル自治区のものを指すが、ここで記述するモンゴル語はモンゴル国の公用語となっているハルハ・モンゴル語である。この言語は他の地域のモンゴル人にも一定程度理解可能である。

ハルハ・モンゴル語はモンゴル国の広い範囲で話されている。モンゴル国の人口約 262 万人のうちの約 90%に当たる 230 万人余りが母語としている¹。中国の内モンゴル自治区にもハルハ・モンゴル語地域があるが、母語話者数は明確ではない。

【関連文献】

栗林均 (1992) 「モンゴル諸語」、亀井孝他編著『言語学大辞典 第4巻』三省堂

岡本雅享 (1999) 『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社

Вандуй, Э., Ж. Цолоо (1969) *Халхын аялгуу*, Улаанбаатар

2. 規範・方言概略

ハルハ・モンゴル語は東部方言、中部方言、西部方言に分けられる。中部方言が標準とされるが、方言間の違いはわずかである。中部方言は首都オラーンバートル（ウラーンバートル）を含む広い地域で話される方言である。

【関連文献】

栗林均 (1992) 「モンゴル語」、亀井孝他編著『言語学大辞典 第4巻』三省堂

¹ 残りの 30 万人近くはモンゴル語の他の方言やカザフ語などテュルク系の言語とのバイリンガルと考えられる。

Амаржаргал, Б. (1988) *БНМАУ дахь Монгол хэлний нутгийн аялгууны толь бичиг I: Халх аялгуу*,
Улаанбаатар.

БНМАУ Шинжлэх Ухааны Академи (1979) *Монгол ард улсын угсаатны судлал хэлний шинжлэлийн
атлас*, Тэргүүн, дэд боть, Улаанбаатар.

Мөөмөө, С., Ю. Мөнх-Амгалан (1984) *Орчин үеийн монгол хэл аялгуу*, Улаанбаатар.

Вандуй, Э., Ж. Цолоо (1969) *Халхын аялгуу*, Улаанбаатар.

3. 文字と発音

ハルハ・モンゴル語は 1940 年代からキリル字で表記されている。現在のモンゴル国の前身であるモンゴル人民共和国はソビエト連邦の大きな影響下にあったため、伝統的なモンゴル字に代わる新しい文字を導入するにあたってキリル字を採用したのである。伝統的なモンゴル字に戻そうという大きな動きが 1990 年代にあったが、移行はならず、現在もキリル字が使用され続けている。キリル字による正書法は現代の音声言語に基づいているが、発音と対応しないところもある。

ロシア字に **ө** と **ү** が加えられた次の 35 文字が現代ハルハ・モンゴル語のアルファベットである。

大文字	小文字	文字の名称	
А	а	/a:/	[ɑ:]
Б	б	/be:/	[pe:]
В	в	/we:/	[we:]
Г	г	/ge:/	[ke:]
Д	д	/de:/	[te:]
Е	е	/je:/	[je:]
Ё	ё	/jo:/	[jɔ:]
Ж	ж	/ʒe:/	[tʃe:]
З	з	/ze:/	[tse:]
И	и	/i:/	[i:]
Й	й	/(xags) i:/	[(xagʷəs) i:]
К	к	/ka:/	[kʰɑ:]
Л	л	/el/	[eɭ]

М	м	/em/	[em]
Н	н	/en/	[en]
О	о	/ɔ:/	[ɔ:]
Ө	ө	/ö:/	[ø:]
П	п	/pe:/	[p ^h e:]
Р	р	/er/	[er]
С	с	/es/	[es]
Т	т	/te:/	[t ^h e:]
У	у	/o:/	[o:]
Ү	ү	/u:/	[u:]
Ф	ф	/fe:/ (/pe:/)	[f ^h e:] ([p ^h e:])
Х	х	/xe:/	[x ^h e:]
Ц	ц	/ce:/	[ts ^h e:]
Ч	ч	/če:/	[tʃ ^h e:]
Ш	ш	/iš/	[iʃ]
Щ	щ	/išče:/	[iʃtʃe:]
Ъ	ъ	/xato:gi:n temdg/	[xato:gi:n t ^h emdəŋ]
Ы	ы	/i:/	[i:]
Ь	ь	/zö:lni: temdg/	[tsø:łni: t ^h emdəŋ]
Э	э	/e:/	[e:]
Ю	ю	/jo:/	[jo:]
Я	я	/ja:/	[ja:]

К, Ф, Щ の 3 文字は外来語の表記にしか使われない。

Й は長母音や二重母音の表記にのみ使用される。

Е は йэ と йө、Ю は йу と йү それぞれ 2 種類の音節の発音に対応する。

【新しく入手しやすい関連文献】

Baasanjav, D and M. Solongo (2002) *Gateway to Mongolian*, Mon Education Press, Ulaanbaatar.

温品廉三 (1998) 『語学王 モンゴル語』 三修社

Sanders, A. J. K. and Jantsangiin Bat-Ireedüi (1999) *Colloquial Mongolian*, Routledge, London and New York.

塩谷茂樹、E. プレブジャブ (2001) 『初級モンゴル語』 大学書林

Скородумова, Л. Г. (2002) *Учебник монгольского языка*, Муравей, Москва.

4. 音節

モンゴル語では閉音節化が進んだ。ハルハ・モンゴル語では、たとえば *mergežil* 「職業」は *meregžil* になり、*temdegle* 「しるしを付けろ」は *temdeegel* となった。その結果、開音節では（特に語末の開音節では）、現れうる母音は長母音と二重母音のみとなった²。現在の正書法の綴りではこの点で発音とくいちがうところがある。

現れうる子音（結合）の型は、音節頭（onset）では /C/, /Cj/, /Cw/, 音節末（coda）では /C/, /Cj/, /CC/, /CjC/, /CCj/ である。（5. 2. 2 および 5. 2. 3 参照）

【関連文献】

栗林均 (1988) 「モンゴル語における弱化母音の発達と閉音節化現象」『音声の研究』22, pp. 209-223,
日本音声学会

Poppe, N. (1970) *Mongolian Language Handbook*, Center for Applied Linguistics, Washington, D. C.

清水幹夫 (1980) 「モンゴル語ハルハ方言の音節構造」『音声・言語の研究』1, pp. 67-77,
東京外国語大学音声学研究室

5. 母音と子音

いくつかの解釈があり、ここに示すのはそのうちのひとつである。

5. 1. 母音

5. 1. 1 短母音

モンゴル語では次の 7 つの短母音が第 1 音節において対立する³。

/i/	[i]	/ir/ (刃)	/il/ (明瞭な)	/ix/ (とても)
/e/	[e]	/er/ (男)	/el/ (この)	/ex/ (母)
/a/	[a]	/ar/ (後ろ)	/al/ (丘)	/ax/ (兄)
	[æ] /Cj/の前	/xarj/ (外国の)	/alj/ (どれ)	/axj/ (進む [語幹])
/ɔ/	[ɔ]	/or/ (ベッド)	/ol/ (得る [語幹])	/ox(ə)r/ (短い)
	[œ] /Cj/の前	/orj/ (叫び声)	/olj/ (突き上げる [語幹])	/oxj/ (優れたもの)

² ただし、ゆっくり丁寧に発音した場合などは、末尾の子音の開放の後に曖昧な母音が聞かれることがある。

³ 異音は主なもののみを示す。以下同様。

/o/	[o]	/or/ (芸術)	/ol/ (靴底)	/ox/ (掘る [語幹])
	[ø]	/Cj/の前	/orj/ (暖かさ)	/olj/ (ほえる [語幹])
/ö/	[ø]	/ör/ (借金)	/öl/ (栄養)	/öx/ (与える)
/u/	[u]	/ur/ (種子)	/ul/ ([否定辞])	/ux/ (死ぬ [語幹])

これらの母音を現代共通日本語の短母音と合わせて図に表すと、概略図1 になる。

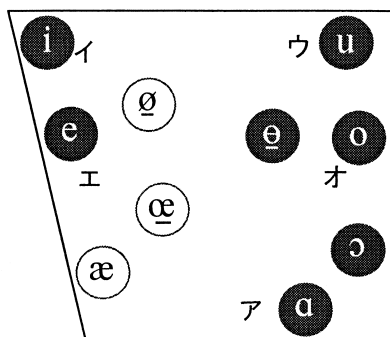


図1
7 短母音と/Cj/が続くときの異音
(カタカナは日本語の母音)

5.1.2. 長母音

長母音も短母音に対応するものが 7 つある。ただし、母音調和という現象があるので、第 2 音節以下ではすべてが直接的に対立するわけではなく、また、音色さえはっきりしていれば次に述べる弱化母音と区別されるので短めに発音されることも多い⁴。

/i:/	[i:]	/bi:/ (私が)	/xi:/ (空気)	/ti:m/ (そうだ)
/e:/	[e:]	/be:/ (腐る [語幹])	/xe:/ (模様)	/te:/ (運ぶ [語幹])
/a:/	[a:]	/ba:/ (大便する [語幹])	/xa:/ (どこへ)	/ta:/ (あなたが)
	[ae]	/Cj/の前	/xoba:rj/ (時間割)	/ga:lj/ (税関)
/ɔ:/	[ɔ:]	/bo:/ (包む [語幹])	/xo:l/ (食事)	/to:/ (数)
	[ɤe]	/Cj/の前	/lo:lj/ (トマト)	
/o:/	[o:]	/bo:/ (鉄砲)	/xo:/ (完全に)	/to:/ (コガラス)
	[ɤe]	/Cj/の前	/sorgo:lj/ (学校)	
/ö:/	[ø:]	/bö:/ (シャーマン)	/xö:/ (厄介)	/tö:/ (指尺)
/u:/	[u:]	/bu:/ ([禁止])	/xu:/ (少年)	/tu:/ (拾い集める [語幹])

⁴ 正書法では短母音字を重ねて aa のように書くが、/i:/ の場合は ий とする。また、/Cja:/, /Cjo:/, /Cjo:/ の場合は /ja:/, /jo:/, /jo:/ の部分を иа, иу, ио と綴る。(тахиа「ニワトリ」、дохио「合図」、хариу「答」)

5.1.3. 二重母音

二重母音は次の4つである。

/ai/	[ae]	/ai/ (恐れる [語幹])	/xai/ (探す [語幹])
/ui/	[ɥi]	/ui/ (鍋に入れる [語幹])	/xui/ (へそ)
/oi/	[ɤe]	/oi/ (喪)	/xoi/ (ケース)
/ɔi/	[ɤe]	/ɔi/ (森)	/xɔi/ (イワナの稚魚)

5.1.4. 弱化母音

第2音節以降における短母音は、意味の弁別に関与しない。たとえば、日本語の[ita]「板」と[ito]「糸」は第2音節の母音[a]と[o]によって区別されているが、現代モンゴル語にそのような例はない。かつては unaqu「落ちる」と unuqu「乗る」のような例があったが、現在はどちらも[onəx]のようになっている。そして、この第2音節以降の短母音は、明瞭には発音されず、その音価は前(後)の音に大きく影響される。ある位置に出現するかしないかは語として決まっているのではなく、音声レベルでの音節構造によって決定される。たとえば、[uxər]「ウシ」と[uxri:ŋ]「ウシの」における[ə]の出現の有無、[amrəx]「休む」と[amərtʃ]「休んで」における[ə]の出現位置は、そこに現れる子音連続が現代モンゴル語において可能なものであるかどうかによって決まってくる⁵。このような母音は弱化母音と呼ばれ、音韻レベルで存在しているものではなく、その出現や音価は音声レベルで決定されるものであるが、ここでは音価を区別せずそれを[ə]で表しておく⁶。

このような特徴を持った母音であるので、ロシア連邦カルムイク共和国のカルムイク語の場合のように正書法では書き表さないという方法があるが、ハルハ・モンゴル語では書き表す方式を採っている。そのやり方は、弱化母音に対して特別な文字を設定するのではなく、短母音表記のための記号を使用するというものである⁷。

第1音節の母音

/a/ /a:/ /ai/ /o/ /o:/ /oi/

第2音節以降の弱化母音の表記⁸

а и

⁵ ただし、形態構造を考えないと出現するかしないかを決定できない場合もある。(たとえば、/xal/+x/ [xələx]「暑くなる」と/xalx/ [xələx]「桶」)など。また、速い発話ではリズムが関わってくるという(Karlsson 2003)。

⁶ 本稿では、以下、派生の途中の段階で現れる弱化母音の位置を音素表記において括弧入りの(ə)で示しておく。

⁷ 弱化母音は意味の弁別に関与しないため、音価がどうであるかということは母語話者にとって重要ではない。正書法では、硬口蓋子音 ж ш ч の後の母音は и で表記するという規則があるが、高等教育を受けた複数のハルハ・モンゴル人が эгшиг を эгшэг、бичих を бичэх と誤って書いたのを目撃したことがある。また、Очирхүү という名前をカタカナで「オチルフー」ではなく「オチヨルフー」と書いてある名刺をもらったこともある。

/ɔ/	/ɔ:/	/ɔi/		о	и
/i/	/i:/	/e/	/e:/	/u/	/u:/
/ö/	/ö:/			ө	и

5.1.5. 母音調和

トルコ語などにおける母音調和は単語（に準ずる単位）内における母音音素の共起制限と言える。モンゴル語では長母音・二重母音に関してはそのように言うことができるが、短母音については音声レベルでの同化現象である。モンゴル語の母音調和は、音声学的には pharyngeal harmony と言える⁹。第2音節以降の長母音・二重母音の現れ方はおおよそ次のようである¹⁰。

第1音節の母音						第2音節以降の母音					
/a/	/a:/	/ai/	/o/	/o:/	/oi/	/a:/	/o:/	/i:/	/ai/	/oi/	
/ɔ/	/ɔ:/	/ɔi/				/ɔ:/	/o:/	/i:/	/ɔi/	/oi/	
/i/	/i:/	/e/	/e:/	/u/	/u:/	/ui/	/e:/	/u:/	/i:/		
/ö/	/ö:/						/ö:/	/u:/	/i:/		

5.2. 子音

5.2.1

モンゴル語の子音は、大きく「張り（tense）」と「弛み（lax）」の2グループに分けられる。破裂音（破擦化したものも含む）は、大まかに言うと、張りの場合は、語頭で無声有気音（e.g. [tʰ]）、それ以外では無声無気音（e.g. [t]）、弛みの場合は、語頭で無声無気音（e.g. [t]）、それ以外で半有声音（e.g. [d̪]¹¹）として現れる¹²。以下に/da:x/（耐える）、/oda:/

⁸ 音節文字 e, ё, я は省略する。

⁹ Svantesson (2003) 参照。しかし、もともとその原理によって調和が形成されたのではなく、調和が保たれつつ母音の音価が変化した結果、現在その原理によって調和が支えられていると考えられる。

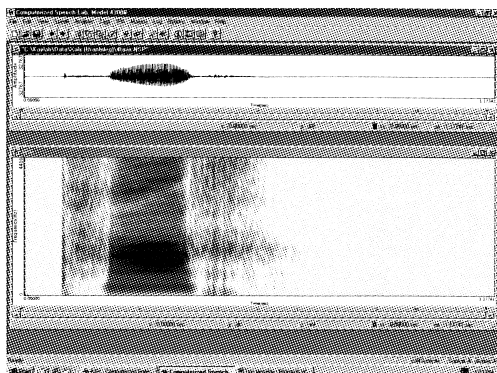
¹⁰ 細かく言うとこれ以外にも存在するが、主なものを示す。

¹¹ 語末では前半が有聲、後半が無声である。

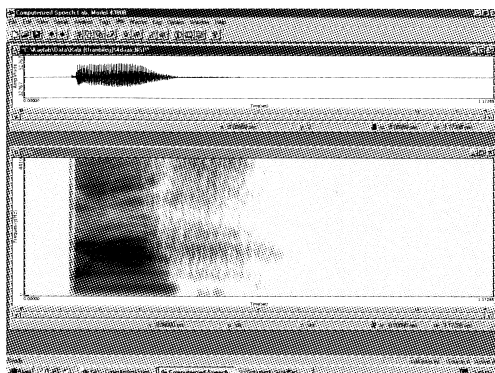
¹² Svantesson (2003) は、張りの破裂音は語頭で無声有気音（e.g. [tʰ]）、語中・語末で pre-aspiration の子音（e.g. [tʰ]）として、弛みの破裂音は無声無気音（e.g. [t]）として実現すると言っている。（/g/ などに関しては語末で無声、他の位置で有聲と言っている。筆者のデータでは、/d/ と同様、半有聲であるが、母音間では摩擦音 [ɣ] となることもある。）ここに示したデータでは語中の母音間の場合に pre-aspiration が大きな違いと考えられるかもしれないが、語末では有聲性の有無による違いが大きい。張り子音と弛み子音は、張りの度合い以外に持続時間の点でも異なる。

なお、①無声有気音（e.g. [tʰ]）、②無声無気音（e.g. [t]）、③有声音（e.g. [d̪]）の聞き分けは、日本人には①と②の間の区別がむずかしいが、モンゴル人にとっては②と③の間の区別がわかりにくい。

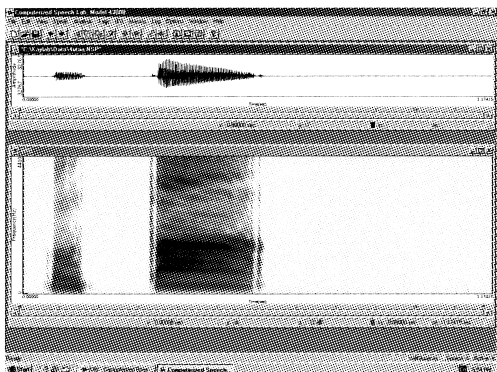
(回)、/sa:d/ (妨害)、/ta:x/ (予想する)、/ota:/ (煙)、/sa:t/ (遅れる [語幹]) の各語を単独で発話したときのスペクトログラムの 1 例を次の図 2 に示す。



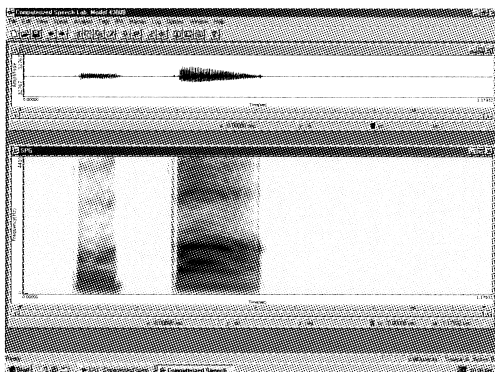
/ta:x/ [tʰɑ:x]



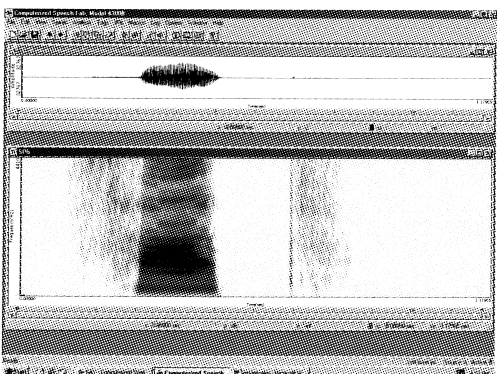
/da:x/ [tɑ:x]



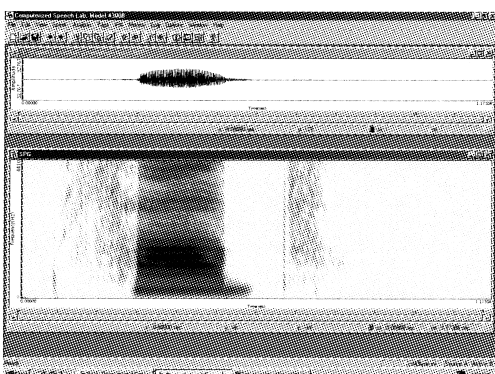
/ota:/ [otɑ:]



/oda:/ [oɖɑ:]



/sa:t/ [sɑ:t]



/sa:d/ [sɑ:d]

図 2 /t/と/d/の音声の音響的特徴 (上から語頭、母音間、語末)

硬口蓋化したものを/C/+j/と解釈すると、モンゴル語には次のような子音がある。外来語のみに現れるものを除くと、その数は20となる。異音は主なもののみを簡略に示す¹³。

/p/	[p ^h]	/par/ (パンパン [擬音語])	/pi:w/ (ビール)
/t/	[t ^h] + 頭	/tar/ (散らばる [語幹])	/tog/ (旗)
	[t] - 頭	/ota:/ (煙)	/bat/ (強い)
/b/	[p] + 頭	/bar/ (トラ)	/bus/ (ベルト)
	[w] - 頭	/daba:/ (峠)	/sab/ (入れ物)
/d/	[t] + 頭	/dar/ (圧す [語幹])	/de:l/ (モンゴル服)
	[d] - 頭	/oda:/ (回)	/ɔd/ (星)
/g/ ¹⁴	[k] + 頭 + 後	/gar/ (手)	/go:/ (美しい)
	[k̚] + 頭 - 後	/ger/ (ゲル)	/giʃu:n/ (メンバー)
	[g̊] - 頭 + 後	/oga:/ (洗え)	/tɔgo:/ (鍋)
	[g̊̚] - 頭 - 後	/nögö:/ (他の)	/tege:d/ (そして)
/ɣ/	[ɣ̊]	/bag/ (小さい)	/lab(ə)ɣ/ (水曜日)
	(/k/ [k ^h])	/ka:/ (κ)	
/m/	[m]	/mal/ (家畜)	/am/ (口)
/n/	[n]	/nar/ (太陽)	/en/ (これ)
/ŋ/ ¹⁵	[ŋ]	/xa:ŋ/ (皇帝)	/saiŋ/ (よい)
/c/	[ts ^h] + 頭	/car/ (大茶碗)	/caga:ŋ/ (白い)
	[ts]	/boca:/ (もどす [語幹])	/ac/ (熊手)
/č/	[tʃ ^h] + 頭	/čarmaj/ (努力する [語幹])	/čad/ (できる [語幹])
	[tʃ]	/ača:/ (荷物)	/bič/ (書く [語幹])
/z/	[ts] + 頭	/zar/ (布告)	/zam/ (道)
	[dʒ̥]	/xeze:/ (いつ)	/az/ (幸運)
/ž/	[tʃ] + 頭	/žar/ (60)	/žil/ (年)
	[dʒ̥]	/moža:ŋ/ (大工)	/e:ž/ (お母さん)

¹³ 「頭」は語頭、「後」は後舌母音の語 (いわゆる男性語) の略。

¹⁴ ここで軟口蓋音を表す音声記号はフランス語などのものよりやや後ろよりの音を表す。/g/は母音間で摩擦音となることもある。

¹⁵ 音節末のみに現れる。

音節末では/n/と/ŋ/が対立する。キリル字ではどちらにもнが用いられるが (/nɛm/ ном「本」、/ɔŋ/ он「年」)、音節末では、/n/はн+母音字、/ŋ/はнのみで表される (/ɔn/ онo「命中する [語幹]」、/ɔŋ/ он「年」)。

/f/	[Φ]	/fe:/	(Φ)	
/s/	[s]	/sar/	(月)	/os/ (水)
/š/	[ʃ]	/šar/	(黄色い)	/de:ʃ/ (上へ)
/x/ ¹⁶	[x]	+後	/xar/ (黒い)	/ax/ (兄)
	[x̥]	－後	/xe:r/ (草原)	/ex/ (母)
/r/	[r]		/araa/ (奥歯)	/ir/ (刃)
	[r̥] ¹⁷		/erx/ (権利)	/dortai/ (好きな)
/l/	[ɬ]		/lam/ (ラマ僧)	/bal/ (蜂蜜)
/w/	[w]		/we:/ (B)	
/j/	[j]		/jar/ (潰瘍)	/goj/ (太もも)

モンゴル語ではもともと[p]と[Φ]は対立せず、外来語の[f]を[p]の音で発音するが、若い世代は[Φ]を使うようである。

B や Φ を意識的にロシア語のように[v]や[f]で発音することがあるが、モンゴル語本来の発音ではない¹⁸。

子音の音素体系は次のようである。

p	t	(k)	
b	d	g	G
m	n	ŋ	
	c	č	
	z	ž	
(f)	s	š	x
	l		
	r		
w		j	

¹⁶ /ŋ/の直後では[kx]となることが多い。(danx/ [danxk] 「やかん」)

¹⁷ 句末や無声子音の直前で無声音として現れる。/delgu:re:s/ [teɬɣure:s] (店から)、/delgu:r/ [teɬɣu:r̥] (店)、/delgu:rt/ [teɬɣu:rt̥] (店に)、/ir(ə)b/ [irəw] (来た)、/irs(ə)ŋ/ [iɾsəŋ] (来た～)

¹⁸ これは、日本語で「バイオリン」と言うときに原語の violin を意識して「バ」を[və]と発音するようなものである。

5.2.2 音節頭子音

/C/, /Cj/, /Cw/が立つ¹⁹。

・ /C/ /g/, /ŋ/, /r/は音節の頭に立たない。/r/は本来単語の頭に立たず、r で始まる外来語は前に母音をつけて発音するが、最近では/r/で始めることがある。

・ /Cj/ この子音連続は後舌母音を含む語にしか現れない。

/pj/	/pjanz/ (レコード)	
/bj/	/bjar/ (力)	/tabj(ə)x/ (置く)
/gj/	/gjalai/ (光る [語幹])	/bɔgj(ə)n/ (短い)
/mj/	/mjang/ (1000)	/tamj(ə)r/ (体力)
/nj/	/njalx/ (幼児)	/tanj(ə)x/ (知る)
/xj/	/xjamd/ (安い)	/dɔxjɔ:/ (合図)
/lj/	/ljaŋxwa:/ (蓮の花)	/xalj(ə)x/ (こぼれる)
/rj/	/xarjɔ:/ (答)	

・ /Cw/ この子音連続も後舌母音を含む語にしか現れない。

/gw/	/gwanz/ [kʷandʒ] (食堂)	/gwai/ [kʷae] (～さん)
/xw/	/xwais/ (アカシア)	/ljaŋxwa:/ [tʃaŋxʷa:] (蓮の花)

外来語においては原語の sp, br などの子音連続は回避される。

пролетари /pɔrljetar/ (プロレタリアート)	штаб /iʃta:b/ (本部)
бригад /barigad/ (作業班)	квадрат /kawdrat/ (平方の)
франц /paranc/ (フランス)	клуб /kulup/ (クラブ)
флот /pɔlɔt/ (艦隊)	клиник /kilinik/ (病院)
трактор /taraktɔr/ (トラクター)	кнопк /kɔnɔpk/ (画びょう)
спорт /isport/ (スポーツ)	грамм /garam/ (グラム)
слесар /selje:sɔr/ (鍛冶屋)	хлор /xɔlɔr/ (塩素)

¹⁹ アルファベットの **в** の名称と /Cw/ という連続にしか現れない /w/ を認めるのは望ましくないかもしれない。代案として、/Cj/ と /Cw/ のような子音の連続ではなく、それぞれひとつの子音と見る方法が考えられる。しかし、そうすると、硬口蓋化子音 (副次的調音として硬口蓋化を持つ子音) は前の母音の音価に影響を与えるのに硬口蓋子音 (主たる調音の位置が硬口蓋の子音) はそうではないということになってしまう。このような理由で、ここでは2音素の連続とし、/w/ を認める解釈を採っておこうと思う。ただし、この場合も [æ.wʲa:] ではなく [aw.ja:] となる **авъя** (取ろう) のような例をどうするかという問題が残る。

5.2.3 音節末子音

/C/, /Cj/, /CC/, /CjC/, /CCj/が立つ²⁰。

- ・ /C/ /w/以外は立つことができる。
- ・ /Cj/ ²¹ /tabj/ [tæwʲ] (50) /onj/ [ønʲ] (柱) /sorgo:lj/ [sorgoetʲ] (学校)
 /tɔtj/ [tʰætʲ] (オウム) /xɔnj/ [xœnʲ] (ヒツジ) /ɔ:lj/ [ɬɔetʲ] (トマト)
 /bɔdj/ [pœdʲ] (菩提) /tɔlj/ [tœtʲ] (鏡) /orj/ [ørʲ] (暖かさ)
 /amj/ [æmʲ] (命) /ga:lj/ [kaetʲ] (税関) /elč/ (使者)
- ・ /CC/ /tabt/ (5 を持つ) /camc/ (シャツ) /e:lž/ (交替)
 /sobd/ (真珠) /oims/ (靴下) /als/ (遠くに)
 /gebč/ (しかし) /godamž/ (街路) /tulš/ (燃料)
 /dabs/ (塩) /emx/ (秩序) /talx/ (パン)
 /dabš.l(ə)x/ (前進する) /end/ (ここに) /gert/ (ゲルに)
 /agt/ (去勢馬) /ɔnc/ (特別の) /ard/ (国民)
 /bugd/ (すべての) /banz/ (板) /gerč/ (証拠)
 /bagc/ (包み) /gonž/ (3 歳のメウシ) /xurz/ (シャベル)
 /sor(ə)gč/ (生徒) /xuns/ (食料) /ders/ (はねがや草)
 /bags/ (刷毛) /daŋx/ (やかん) /xarš/ (宮殿)
 /bagš/ (先生) /mönŋ/ (銀) /erx/ (権利)
 /xamt/ (一緒に) /alt/ (金 [きん])
 /xjamd/ (安い) /ald/ (尋 [長さの単位])
- ・ /CjC/ /tabjt/ (50 人隊) /arjs/ (皮) /xaljs/ (殻)
- ・ /CCj/ /aŋgj/ (クラス) /tamxj/ (タバコ) /arxj/ (酒)

5.2.4 その他

5.2.4.1

はっきり丁寧に発音されたとき、子音が長めに現れることがある。語末では開放のあと

²⁰ 音節末に/j/を含む連続は後舌母音を持つ語にしか現れない。そして、その/j/は直前の音節の母音の音価に大きく影響を与える。

なお、ここに示す例は網羅的ではなく、だいたいを示すにとどめた。

²¹ 形態素境界に関する情報がないと弱化母音が挿入される位置が決定できない場合がある。たとえば、/xɔn+/j/ [xɔnɔj]「泊まろう」と/xɔnj/ [xœnʲ]「ヒツジ」

に軽く母音が聞こえることもある。

/ɔd/ [ɔd:] (星)	/ax/ [ax:] (兄)	/xɔl/ [xɔt:] (遠い)
/xad/ [xad:] (岩)	/ex/ [ex:] (母)	/baj(ə)ŋ/ [paj:əŋ] (金持ちの)
/nas/ [nas:] (年齢)	/gaz(ə)r/ [Gadz:ər] (場所)	

5.2.4.2

次のような語において、無声化と同時に異化が起こって、/g/が[x]、/G/が[X]のように摩擦音で実現する。

/er(ə)gte:/ [erəxt:] (男) /em(ə)gte:/ [eməxt:] (女) /ʃo:r(ə)gtai/ [ʃo:rəxtae] (嵐のある)

5.2.4.3

2 つ続いた子音が 1 つで発音されることがある。

/so:d(ə)ggu/ [so:dəggu] [so:dəggu] (住んでいない)
/aʒ(ə)ll(ə)d(ə)g/ [adʒəHədəg] [adʒəHədəg] (働いている)

【関連文献】

Дамдинсүрэн, Ц. (1959) Шинэ үсгийн дүрэм, *Монгол хэл бичгийн зарим асуудал*, Улаанбаатар.

橋本邦彦 (1982) 「韻律理論による母音調和の分析」『室蘭工業大学研究報告・文科編』pp. 109-139.

城生佰太郎 (1976) 「モンゴル語の母音調和」『言語』5-6, pp. 53-61, 大修館書店

城生佰太郎 (2003) 「モンゴル語母音調和の研究 (1)」『文藝言語研究 言語篇』43, pp. 41-69,

筑波大学

角道正佳 (1974) 「ハルハ方言の正書法」『日本モンゴル学会会報』5, pp. 29-35.

角道正佳 (1976) 『音韻規則と方言—Buriat と Khalkha—』大阪外国語大学モンゴル語研究室

Karlsson, Anastasia (2003) Rhythmical and accentual structure of Mongolian, 15th ICPHS, pp. 2465-2467,

Barcelona.

栗林均 (1981) 「現代モンゴル語における『唇の母音調和』について」『一橋研究』6-2, pp.98-112,

一橋大学

Лувсанвандан, Ш. (1967) *Орчин цагийн Монгол хэлний бүтэц, 1-р дэвтэр: Авиа, авиалбар хоёр нь*,

Б. Н. М. А. У. Шинжлэх Ухааны Академи, Улаанбаатар.

Лувсанвандан, Ш. (2002) *Монгол хэлний авиазүйн онол практикийн асуудлууд*, Улаанбаатар.

- Мөөмөө, С. (1975) К вопросу системы консонантизма современного монгольского языка,
Studia Mongolica, III, pp. 273-304, Ulan-Bator.
- Мөөмөө, С. (1979) *Орчин цагийн Монгол хэлний авиан зүй*, Улаанбаатар.
- Надмид, Ж., Ц. Жанчивдорж, Б. Рагчаа (1971) *Монгол хэлний зүй: авиа зүй, зөв бичих дүрэм*, 4 хэвлэл,
 Улаанбаатар. (栗林均訳『モンゴル語の発音と正書法』1977)
- 温品廉三 (1995) 『モンゴル語—発音事項中心の入門— (上巻)』東京外国語大学語学教育研究
 協議会
- Rialland, A. et R. Djamouri (1984) Harmonie vocalique, consonantique et structures de dépendance dans le
 mot en Mongol Khalkha, *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 79, pp. 333-383.
- 斎藤純男 (1984) 「現代モンゴル語の弱化母音と母音調和」 *Lexicon*, 13, pp. 57-71, 岩崎研究会
- 斎藤純男 (1985) 「現代モンゴル語の音韻解釈」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』7-1, pp. 5-10.
- Saitô, Yoshio (1986) The Consonant System of Modern Khalkha Mongolian, *In Honor of Shigeru Takebayashi*,
 Kenkyusha, Tokyo, pp. 115-128.
- Street, John C. (1963) *Khalkha Structure*, Indiana University.
- Svantesson, Jan-Olof (1996) Glides in Mongolian Phonology, in Lars Heltoft and Hartmut Haberland eds.,
Proceedings of the Thirteenth Scandinavian Conference of Linguistics, Roskilde University,
 pp. 209-216.
- Svantesson, Jan-Olof (2003) Khalkha, in Juha Janhunen ed., *The Mongolic Languages*, Routledge.
- Төмөрцэрэн, Ж. (1968) Монгол хэлний үе эс бүтээх эгшгийн учир, *ШУА-ийн мэдээ*, 1, х. 61-68,
 Улаанбаатар.
- Төмөрцэрэн, Ж. (1970) Монгол хэлний үе хураагдах ёс, *Хэл зохиол судлал*, VIII, pp. 179-200,
 Улаанбаатар.

6. プロソディー

6.1. アクセント

アクセントによって語の意味を区別しないが、音声学的には第 1 音節が顕著であると言
 ってよい。

6.2. イントネーション

イントネーションに関しては詳しい研究が行われておらず、全体的な記述ができる状況

ではないので、ここでは強調などのない平叙文を中心に簡単に述べるにとどめる。

音調の単位としての句は、上がって下がるという音調（LHL）を基本音調として持っていると考えられる。

6.2.1 1 語文の場合

6.2.1.1 単語 1 つを単独で発音したときのイントネーション

短母音を持つ 1 音節語では LHL の上がりの部分はそれほど明瞭には現れない。

Ном. [nɔm] （本です。）

Ус. [os] （水です。）



長母音、二重母音の場合は LHL が明瞭に実現する。

Үүд. [u:d] （ドアです。）

Найз. [naedz] （友だちです。）



第 1 音節に短母音を持つ 2 音節語は、第 1 音節が低く、第 2 音節にかけて上がり、第 2 音節の中で下がる。

Манан. [mənən] （霧です。）

Нохой. [nɔxɔj] （イヌです。）



第 1 音節に長母音、二重母音がある 2 音節語は、その中で緩やかに上がり、第 2 音節の中で下降する。

Нийгэм. [ni:ɡəm] （社会です。）

Майхан. [maɪxən] （テントです。）

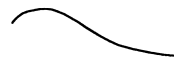


6.2.1.2 「修飾語＋名詞」を単独で発音したときのイントネーション

語としては 2 つ（以上）でも 1 つの句としてひと続きに発音されるため、全体が LHL の音調を持つが、次の場合は[en]の[n]の部分にピークが来る。

Энэ ном. [ennɔm] （この本です。）

Энэ найз. [ennaedz] （この友だちです。）



次の場合は[saen]の[ae]の後半部分にピークが来る。

Сайн ном. [saennɔm] （いい本です。）

Сайн найз. [saennaedz] （いい友だちです。）



次のものの場合は、[mini:]の[i:]にピークが現れる。

Миний ном. [mini:nɔm] (私の本です。)

Миний найз. [mini:naedʒ] (私の友だちです。)



6.2.2. 「AはBだ。」のイントネーション

「Aは」の部分と「Bだ」の部分が別の句として発音される。

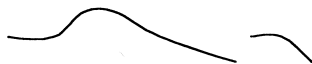
Энэ бол ном. [en wɔɪ nɔm] (これは本です。)



Энэ миний ном. [en mini: nɔm] (これは私の本です。)



Миний ном энэ. [mini: nɔm en] (私の本はこれです。)



区切らず続けて発せられた場合、「Aは」の最後の部分のピッチが上がってそのままのこともある。

6.2.3 「AはBをする。」のイントネーション

「Aは」の部分と「Bをする」の部分が別の句として発音される。

Би ном уншина. [pi: nɔm ʊnʃɪn] (私は本を読みます。)

Та айраг ууна. [tʰɑ: aerəŋ ʊ:n] (あなたはアイラグを飲みます。)



6.2.4. 疑問文のイントネーション

最後が上がるが、下がる言い方もある。それらの間には発話意図に相違がある。

Та Токиогоос ирсэн уу? [tʰɑ: tʰɔ:kʲo:ŋɔ:s iɾsno:] (東京から来ましたか。)

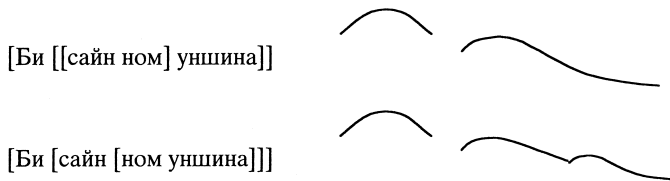
Та юу уух вэ? [tʰɑ: jo: ʊ:x we:] (何を飲みますか。)



6.3. その他

6.3.1.

句の区切りは音調と長さによって表されるので、たとえば Би сайн ном уншина. [pi: saen nɔm ɒŋʃən] という文は、「私はいい本を読む」の場合は[saen nɔm] (いい本) が音調的にひとつのまとまりをなし、「私は良く本を読む」の場合は[saen] (良く) と[nɔm] (本) 以下がそれぞれ別の音調句に分かれる。



6.3.2.

次の対話はふつう下線の部分にフォーカスがおかれ、その部分が高めに実現する。

A: Таний мэргэжил юу вэ? [tani: merəɣdʒɛʃ jo: we:] (あなたの職業は何ですか。)

B: Миний мэргэжил багш. [mini: merəɣdʒɛʃ baɣʃ] (私の職業は教師です。)

6.3.3.

深い切れ目があるがそこで句が終わらない場合、その末尾音節のピッチが上がる。

Дасгал хоёр [tasɣɛʃ xɔjɔr] (練習 2)

Хичээл арав [xɪtʃeʃ arɔw] (第 10 課)



6.3.4.

内容的に切れていない場合、統語構造上の文としては完結していても末尾音節のピッチが上がることもある。

Та энд сууж болно. ... [tʰa: end so:ɣɔʒ pɔʃnɔr] ...

(ここに座ってもいいです。でも、…)

【関連文献】

城生佰太郎・三上司 (1981) 「モンゴル語のアクセント」『文藝言語研究 言語篇』6, pp. 143-165,

筑波大学

角道正佳 (1982) 「ハルハモンゴル語のピッチアクセント」『大阪外国語大学学報 (言語編)』56, pp. 31-49.

Karlsson, Anastasia (2001) An introductory study of Mongolian intonation, *Working Papers* 49, pp.82-85, Dept. of Linguistics and Phonetics, Lund University.

Karlsson, Anastasia (2003) Rhythmical and accentual structure of Mongolian, 15th ICPHS, pp. 2465-2467, Barcelona.

清水幹夫 (1979) 「モンゴル語アクセントの特徴」『音声学会会報』162, pp. 9-11, 日本音声学会

Shimizu, Mikio (1989) The Accent of Modern Mongolian『吉沢典夫教授追悼論文集』pp. 171-176

清水幹夫 (1992) 「モンゴル語の音韻変化とアクセント」『日本モンゴル学会紀要』23, pp. 118-135.

Svantesson, Jan-Olof (1990) Phonetic Correlates of Stress in Mongolian, *Proceedings of International Conference on Spoken Language Processing*, 1, pp.617-620.

7. モンゴル語音声の多様性

ハルハ・モンゴル語の内部でも、/i/と/e/の区別がない、/oi/や/ui/が/i:/となっている、などの音声的変異があるが、ここでは内モンゴルのモンゴル語のうちの有力な方言に見られる特徴をいくつか挙げる²²。

/žir/ (60) のように/i/ [i]を持つ語がある。

/e/は[e]ではなく[ə]のような音価を持つ。

ハルハ・モンゴル語で[æm^h] (命)、[mœr^h] (ウマ) などは、子音の硬口蓋性が弱まってそれぞれ[æm] [em]、[mœr]のようになっている。

ハルハ・モンゴル語の二重母音が長母音に対応する。ハルハ・モンゴル語の[sæŋ] (よい) は[sæ:ŋ] [se:ŋ]、[per] (近い) は[œ:r]のように現れる。

/l/の摩擦の度合いは地域差等があり、内モンゴルの方言では摩擦が聞かれない。

/c/ /z/はない。ハルハ・モンゴル語の/cas/ [ts^has] (雪)、/zas/ [tsas] (直す [語幹]) はそれぞれ/čas/ [t^has]、/zas/ [t^has]のようになる。

ハルハ・モンゴル語で第 1 音節と第 2 音節の初めの閉塞音がともに張り (tense) の語、たとえば/tɔs/ [t^hɔs] (油)、/xot/ [xot] (町) などは、方言によっては異化が起こり、/dos/ [tɔs]、/got/ [kot]のように現れる。

²² ここでは特定の方言を記述しようとするものではない。

多くの方言においては後ろに何も続かないときの *-n* は[ŋ]に変化したが、バーリン方言などでは元の *-n* を保ち、たとえばハルハ・モンゴル語などの[ɔŋ]（年）には[ɔn]が対応する。

【主な関連文献】

Cinggältai (1959) *Monggul kälän-ü Bagarin-u aman ayalgun-u abiya-yin jüi ba üges-ün jüi, Dumdadu ulus-un sinjiläkü ukagan-u küriyäläng-ün tölögälägcid.*

道布（1983）『蒙古語簡誌』民族出版社

Janhunnen, Juha ed. (2003) *The Mongolic Languages*, Routledge.

栗林 均（1989）「内蒙古語」『言語学大辞典 第2巻』三省堂

Мөөмөө, С., Ю. Мөнх-Амгалан (1984) *Орчин үеийн монгол хэл аялгуу*, Улаанбаатар.

諾爾金 編著（1998）『標準音—察哈爾土語』内蒙古人民出版社

Sagaster, Klaus ed. (1999) *Antoine Mostaert (1881-1971), C. I. C. M. Missionary and Scholar, Vol. Two: Papers*, Ferdinand Verbiest Foundation, K. U. Leuven.

孫竹 主編（1990）『蒙古語族語言辭典』青海人民出版社

Тодаева, Б. Х. (1985) *Язык монголов внутренней монголии. Очерк диалектов*, Москва.

【追記】

本稿執筆時には利用できなかったが、重要な研究として次の2つがある。

Karlsson, Anastasia and Jan-Olof Svantesson (2004) *Prominence and Mora in Mongolian*, in B. Bel and I. Marlien eds., *Proceedings, Speech Prosody 2004 (Nara, Japan)*, pp.65-68.

Svantesson, Jan-Olof et al. (2004) *The Phonology of Mongolian*, Oxford University Press.